

馬獣医のよもやま話³⁰ 大塚 智啓獣医師

馬鼻肺炎 (ERV) について



浦河診療所 大塚智啓

出身地

東京都

平成25年3月

北海道大学卒業

10月になり朝夕大分冷え込んで参りましたが、皆様は風邪等ひかれてませんか。今回はこれからの時期によく見られる病気として馬鼻肺炎についてお話をさせていただきたいと思います。

馬鼻肺炎 (ERV) とは？

馬鼻肺炎は、馬ヘルペスウイルスというウイルスの感染により起こり、馬のウイルス性疾患のなかでも最もポピュラーな病気です。生産地では妊娠馬に流産を起こすことから、その被害は甚大です。また、全ての馬に熱性の呼吸器疾患を起こし、とくに競走馬では調教スケジュールや競馬出走への直接的影響が問題となります。

感染経路

馬ヘルペスウイルスの感染は感染馬のくしゃみなどに含まれたウイルスによって感染する飛沫感染と馬体同士が接触して感染する接触感染があります。また、流産の場合には胎盤、羊水および流産胎子等に大量のウイルスが含まれるため接触感染の危険性は高いです。

症状

子馬が馬ヘルペスウイルスに感染すると、39～40.7℃の発熱が5日程度続きます。発熱に伴い水様性の鼻汁を出し、翌日から約3日間大量の膿性鼻汁を漏出します。その後、鼻汁の量は減少していき約10日で認められなくなります。下顎リンパ節の腫脹が発熱後2～3日目から現れ約5日間認められ、食欲の減退は発熱初期あるいは高熱期に認められます。また、四肢の浮腫や下痢も認められることがあります。これらの症状は、初めて馬ヘルペスウイルスに感染した馬にみられるもので、過去に感染したことがある馬では症状は軽いことが多く、1～2日間の発熱で終わるものが大半です。他に水様性鼻汁や下顎リンパ節の腫脹も認

められますがいずれも多くは一過性です。稀に発熱後に起立不能や後駆麻痺などの神経症状が認められる場合があります。

流産は妊娠9ヶ月以降に起こりやすく、ほとんど異常を呈さず突然流産することが多いです。妊娠後期に感染した場合は、死産となるケースが多く、子馬は生きて生まれたとしてもほとんどが36時間以内に死亡します。

馬鼻肺炎は、呼吸器疾患の場合2次感染による肺炎を予防できれば予後は良好ですが、神経症状馬は症状が重い場合に予後不良となることがあります。



馬鼻肺炎による流産胎子 (写真提供元:日高家畜保健衛生所)

予防と治療法

治療は、熱性の呼吸器疾患の場合は対症療法と二次的な細菌感染による肺炎予防のため抗生剤投与を行います (馬ヘルペスウイルス自体には抗生剤は効きません)。

流産が発生したら検査結果が出るまでは、馬鼻肺炎と仮定することが大事です。胎盤、羊水および胎子には大量のウイルスが含まれています。厩舎内の感染蔓延を防ぐために、まずその胎盤、胎盤、母体、それらが付着した寝藁、馬房、靴、衣服等の消毒を行いましょう。消毒後流産馬を隔離しましょう。消毒には塩素系の消毒剤 (ピルコン、クレンテ等) が有効です。

完全に予防できる訳ではありませんが、流産予防には妊娠馬にワクチンを接種する方法があります。妊娠9ヶ月までに基礎接種を1ヶ月間隔で2回接種し、ワクチンによる抗体の持続期間が短いいためその後1ヶ月おきに補強接種することが望ましいとされています。

以上で終わります。ありがとうございました。